

児童教育を支援する「博報財団」が、すぐれた取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

国際文化理解教育部門

宮城県 ● 外国人の子ども・サポートの会

きょうだいの勉強をみるように
学習をサポート

仙台駅にほど近いエル・ソーラ仙台（公益財団法人せんだい男女共同参画財団運営）28階のオープンスペースに、母親と小学校4年生の少女がやってきた。彼女は、日本人の父とタイ人の母の3人家族で、仙台で生まれ、育った。ここで毎週、外国人の子ども・サポートの会のサポーター会員、小林時さんと勉強を始め、2ヶ月になる。

少し困った顔を見せる。「どこが分からないかを、きちんと分かっていることが大切。彼女はそれが明確なので、とても進めやすいです」と、小林さんは温かいまなざしで彼女を見つめた。

国。現在は、59名の生徒会員を75名ほどのサポーター会員がフル稼働で支援しています。子どもたちは、生まれた国も違えば、日本語の習得度も異なります。一人ひとりをきちんと見ていくためには、

マンツーマン指導が大切。これは発足以来、変わらない同会の方針です（田所さん）
外国につながるのがある中学生と母国の中学校卒業後に来日した生徒には、複数人でチームを組んで、高校受験と

「5年生になるともっと勉強が難しくなる。学習が遅れ気味なので、学校の先生の勧めで来るようになりまして」とお母さんは語る。彼女は、日常会話にはまったく不自由ないが、「学校の授業は難しい言葉が多くて、よく分からない」と

外国人の子ども・サポートの会は、2005年の発足以来、受け入れ態勢が十分に整っていない地域で、外国につながる子どもたちの学習支援に力を注いできた。同会は、年会費で会の運営を支える「会員」、学習サポートを受ける子どもと保護者の「生徒会員」、学習を見守る大学生や社会人の「サポーター会員」で構成されている。

そうした3者をつなぐ役割を担っているのが、代表でコーディネーターの田所希衣子さんだ。「生徒会員の出身国は13カ

国。現在は、59名の生徒会員を75名ほどのサポーター会員がフル稼働で支援しています。子どもたちは、生まれた国も違えば、日本語の習得度も異なります。一人ひとりをきちんと見ていくためには、



まるで姉妹のようにリラックスした表情で学習を進める生徒会員の少女とサポーター会員の小林時さん。「分からないところがあると悔しい。分かるようになりたい！」と学ぶ意欲もとても高い。

外国につながる子どもの学習を1対1でサポートし、子どもとサポーターが学び合う場を提供

子どものニーズを丁寧に受けとめ、きめ細やかな支援を続けている「外国人の子ども・サポートの会」。外国人散住地域でありながらも、地域を巻き込んだボランティアの確保により実現している同会の活動に、博報賞が贈られた。

推薦者 お祝いのことば

ある日、私の手元に博報賞の推薦要項が届きました。要項の賞金100万円に目が留まりました。日ごろからお世話になっている外国人の子ども・サポートの会にプレゼントできたらどんなによいだろうと思い、推薦状を書き始めました。書類を準備しながら、サポートの会に連絡を取りましたが、なかなか連絡がつかず、結局、勝手に応募してしまいました。受賞の連絡が来た時は本当に驚き、サポートの会の皆さんが喜んでくれているのを見て、とても幸せな気持ちになりました。これから子どもたちに寄り添い、素敵な活動をしていってくださることを期待しています。

国立大学法人 宮城教育大学 高橋亜紀子 教授



仙台市街が一望できる明るいエル・ソーラ仙台の市民交流・図書資料スペース。「市民の方にも学習の様子を目にしてもらえるオープンスペースでの活動にこだわりました」と田所さん。



漢字テストに備えて。お母さんは「私よりも日本語は上手なんです」と目を細める。



「田所さんからは“子どもファースト”の考えを学んだ」と話す平間洗舗さん。

同会を卒業した子どもが次はサポートする側に。つながる支援の循環

サポーター会員のひとり、

入学から高校3年生までの学習サポートを行っている。田所さんは、生徒会員が何に困っているのか、どんなサポートを望んでいるのかを子どもと保護者から丁寧に聞き取り、条件に合うサポーター会員とマッチングする。

「僕はチリ出身の小学6年生の男の子のサポートをしてきました。チリはスペイン語圏ですが、僕はスペイン語が話せません。最初はコミュニケーションがとれるかどうか不安でしたが、チリと日本の街の画像を見せ合ったり、チリ領であるイースター島にいつか行きたいねとおしゃべりしたり、僕自身とても楽しい時間が過ごせましたね。逆に多くのことを僕が教えてもらいました。子どもたちは一人ひとり違い、どの子も個性的。これから教師生活を送るうえで、大きな糧となる経験となりました（平間さん）」

さらにサポーター会員の中には、同会の卒業生もいる。「自分がいけば彼らの気持ち分かるから」と、参加してくれています。外国につながる子どもたちには、母語も大切にしてほしい。母語や母国の文化を理解しているお兄さん、お姉さんの存在は、不安な想いを抱えている子どもたちにとって、大きな安心につながります（田所さん）

子どもたちが成長していく姿や異文化に触れることで、力をもらうサポーター会員、やがてサポートする立場へと回る生徒会員。多様な文化背景を有する人々が増えている現代日本において、複数の言語、文化を理解する人々の役割はますます重要度を増している。

同会で学ぶ子どもたち、サポーターの相互的な支援の循環は、理想的なモデルケースといえよう。



同会代表の田所希衣子さん。「常に課題に対応できるよう小回りの利く運営を大切にしているので、子どもたちの成長や世の中の変化に合わせられる」と語る。